

## 第二章 祭りと信仰

## 第一節 寺社と各地の祭り

## 富士宮地域の神社と寺院

市内には、神社と寺院のほか堂や祠など多くの信仰施設がある。とくに、市名の由来でもある富士山本宮浅間大社（以下、浅間大社）があり、富士浅間信仰の拠点の一つとなっている。また、ムラ（村落）には氏神あるいは鎮守・産土（神）と呼ぶ神社がある。その氏神を祭祀するのが氏子であり、氏子は市域ではごく近年まで自治会（区）の構成員と同じであった。

市内の神社には、〇〇八幡宮など「八幡」と付く神社がある。八幡宮（八幡神社）とは、大分県宇佐市の宇佐神宮に始まる神社の総称である。特に源氏が八幡を氏神にしたことから、西日本中心であった信仰圏が東日本にも拡大した。武神としての八幡信仰は古代からあったが、武士以外の幅広い階層の人々により開拓地の農耕神としても信仰されるようになった。また、日蓮宗の開祖日蓮が八幡大菩薩を法華経の守護神としたことから、日蓮宗独特の曼荼羅には天照大神と八幡大菩薩の名が記されている。日蓮宗系寺院が多い市域に八幡を氏神とするムラが目立つのは、農業開発に関わりながらも信仰的な背景が関係していると考えられる（桑原一八二〇）。

山神社は、区や組（班）単位で祀ることが多い神社である。市域は山に囲まれた豊かな自然環境にあり、人々はその山から燃料とする薪炭類、屋根材や緑肥、厩肥とする草木類など多くの恩恵を得て暮らしていた。山の神は山と里の境で、農林業に携わる人々の暮らしを守る

存在であった。また、大宮のまちに多いのが屋敷を守る稻荷である。稻荷は農業や漁業に携わる人たちが信仰し、町では商売繁盛の神としても信仰される。人々の生活生産活動は、身近に生業神を祀ることで保障されたのである。

寺院の中で多数を占めているのは、日蓮宗系の寺院である。それは、日蓮の六人の高弟「六老僧」の一人、日興とその弟子たちによって開かれた「富士五山」があるためである。富士五山とは、上条の大石寺、北山の本門寺（重須本門寺）、下条の妙蓮寺、小泉の久遠寺、西山の本門寺の総称であり、それぞれ坊や末寺をかかえる（大）本山でもある。これらの寺院を中心に、檀家や信者の健康を祈願する祭りが行われている。

このほか、寺社以外にも堂や祠に祀る神仏がある。子どもが無事な成長を願うのは安神や道祖神、地藏菩薩などである。道祖神や地藏菩薩は、馬頭観音や甲子塔などほかの石造物と同様に路傍の辻や峠、橋のたもとに祀られることが多い。その場所は、生活の場であるムラの内と外を分ける境であり、異界の入口として意識された場でもある。このような場所に神仏を祀るのは、外からやってくる災厄や疫病が地域に入るのを防ぐためである。

ここでは、市内すべての寺社・堂・祠の信仰と各地の祭りを紹介することはできないが、一年の巡りの中で特徴的な祭りを取り上げ、その信仰的な背景を探ってみたい。

## 一年の無事と豊かな実りを願う祭り

正月から三月にかけて、各地では新たな年を迎えて祝う祭りが行われる。また、田植えが終わる六月には豊作祈願の祭りがある。

## 星山の倭文神社の祭り

星山の氏神である倭文神社では、正月・七月・一〇月の一七日に祭りが行われてきたが、現在は祭日に近い日曜日となっている。倭文神社は、延喜式の神名帳にも記載されている古社であり、「倭文」とは「倭文織」のことで、楮・梶（いずれもクワ科）や麻などの植物繊維を緯糸に使った綾織の布をいう。『駿河志料』巻之六十には、倭文を織った地なので機殿（機織りの建物）の地に「織倭文天神社」があったと記されている。現在、社地は大悟庵の境内にあり、江戸時代には大宮の社人がやって来て神供を献じたという（中村 一八六一）。この神社には神殿（本殿）がなく、ただ大石を置いて神座としているとし、現在も拝殿のみで本殿の建物はなく（写真2-1）。現在の神事は、浅間大社から神職がやって来て、星山の氏子総代や区長などの関係者と当番班が参列して行われている。

## 星山観音堂の祭り

星山の曹洞宗明星山大悟庵では、三月一八日に星山観音堂の祭礼が行われてきたが、現在は祭日に近い日曜日に行われている。大悟庵は、かつては真言宗で明星山福興寺と称した。元の境内は星山の集落の南方、明星山にあつたが、兵火にあつて七堂伽藍が焼け、甲斐国曹洞宗深向院三世了月が再建して大悟庵とした。天正一八年（一五九〇）に朱印地として現在地をもらい、集落の中に移転したという（大宮町 一九三〇）。明星



写真 2-1 倭文神社祭壇



写真 2-2 星山観音御開帳

山には福興寺のほか、倭文神社・弁財天・山の神・大六天・愛宕・牛頭天王などが祀られ、観音堂も境内にあつたと言いつづけている（遠藤 一九七五）。

倭文神社北側に建つ星山観音堂には、白木綿二二〇反を縫い合わせ、墨汁で描いた十一面観音坐像が納められている。三月一八日はこの観音を御開帳する祭りで、堂の背後にある山の斜面を切り開き、支柱に白布を垂らして斜面全体に広げる（写真2-2）。祭りは星山一区が中心で、各家から男性一人が出て準備する。

現在の観音像は、昭和二八（一九五三）年に愛知県知多郡洞雲院住職、大塚洞外氏が描いたものである。白布には寄進者の名前も記載されており、延宝五年（一六七七）以降、明治四二年（一九〇九）まで五回描写されたという（大宮町 一九三〇）。この祭りは「星山の観音さん」として古くから知られ、かつては農具を商う「箕市」が開かれた（遠藤 一九七五）。露店が多く並び、大宮のまちや沼久保の子どもたちは小遣いをもって遊びに来るのが楽しみであったという。

### 神田蔵屋敷稲荷の初午祭

大宮のまちには各所に稲荷が祀られている（図2-1）。稲荷は屋敷や土地を守る神として祀ることが多いが、大宮では区の氏神になったものもある。蔵屋敷稲荷神社は、神田区が祀る氏神である。市立大宮小学校正門外の西にあり、神田区公会堂は神社の社務所を兼ねている。大宮小学校は大宮城跡にあり、「蔵屋敷」とは大宮城の蔵屋敷に由来するという。祭りは初午と八朔に行われる。初午は立春が過ぎて最初の午の日をいい、全国的にも稲荷の祭日とされている。現在、神田区では三月第一日曜日に初午祭りを行っている。当番は赤飯を用意し、朝九時ごろから参拝にくる子どもや氏子に振舞う。近所の子どもは五色の紙を貼り合わせた幟に、低学年は「はつうま」、高学年は「正一位稲荷大明神」と書き、自分の氏名を記入して持参する。これを参道に立て、子どもは赤飯と菓子をもって帰る（写真2-3）。



写真 2-3 蔵屋敷稲荷の幟



図 2-1 大宮のまちの稲荷神社の地図（地理院地図 Vector を加工して作成）

## 内房の田の神送り

本格的な農作業が始まると、その年の豊かな実りを祈願する行事が行われる。かつて、富士川下流域や芝川流域などでは、稲の豊作を願って田の神を迎え、田植えが終わると田の神を送る「田の神送り」、「農神送り」などという行事が盛んに行われていた。

内房の相沼では、集落中のすべての田植えが終わった六月中旬に、田の神送りという行事が行われる。まず、二mほどのヤマトダケに紙垂を付けた笹竹を、太鼓を乗せるリヤカーの四方に立て、ほかに二〇本ほどの笹竹を用意する。自治会役員や保護者、子どもたちが行列を組んで、リヤカーに乗せた太鼓を叩きながら、集落の西端にある境川の吊り橋から東端の長田橋まで、「田の神送り、送り神送り」と唱えながら進む。橋に到着すると、笹竹とリヤカーにつけた四方竹を川に投げ入れる（写真2-4）。その後、子どもはオブツコ（御仏供）をいただいて解散する。オブツコは以前は赤飯だったが、現在はお菓子を配る。吊り橋は用水路の取り入れ口にあり、長田橋は相沼集落の東境にあたる。集落の西から東へ（上流から下流へ）と払いながら田の神を送るといふ行事は、田植えの無事を祝うと同時に、田の害虫や夏の疫病を払うという疫神送りの意味も込められていると考えられている。内房では、このような田の神送りが落合・尾崎・仲でも行われている。



写真 2-4 内房相沼の田の神送り

## 夏病み除けを願う祭り

夏は暑さとともに、疫病が流行する季節である。特に風水害や干ばつなどで生活用水が汚染したり涸れたりして、人の命に直結する流行病が起こりやすい。そのため、夏には身の穢れを祓い清めたり、疫病退散を願って神輿を担いで村中を払ったりする祭りが多い。

### 根原浅間神社の湯立

根原では、六月第二日曜日に氏神浅間神社の例祭が行われる。例祭に先立って、境内では釜で湯を沸かして湯立を行う。まず、湯釜の前に氏子が参列し、宮司による神事が行われる。修祓の後、湯釜を釜の湯に入れ、湯花（湯しぶき）を散らして四方を祓う（写真2-5）。再び、湯釜を湯に浸け、湯花で氏子も祓い、これを三度繰り返す。湯立が終わると、全員社殿に入り神事が行われる。使われた湯釜は、かつては氏子が一本ずつもらい受け、家で飼っている牛に与えたという。

このような湯立は、市内では根原のみで行われている。湯立は、熱い湯を浴びることにより災厄を払い、身を清める神事である。富士山麓では東麓の御殿場市のほか、北麓では山梨県富士吉田市や山中湖村などで行われていたが、現在は山中湖村で伝えられているのみである。根原の



写真 2-5 根原浅間神社の湯立

湯立は、山梨県境を越えて湯立の作法を持ち込んだ宗教者がいたと考えられるが、現在は伝承もないため不詳である。

### 向原八幡宮の天王祭

六月から七月にかけては、全国各地で疫病退散を願う天王祭、祇園祭が盛んに行われる。静岡県内の天王信仰は、京都府の八坂神社と愛知県の津島神社の二系統の祭神牛頭天王の勧請によって広まった。

小泉の向原八幡宮では、七月第二土曜日に天王祭が行われる。現在は、宗教的配慮から夏祭りと呼んでいる。向原八幡宮の氏子は小泉の五区・六区の住民で、九〇〇戸ほどである。天王社は向原八幡宮の境内にあり、祭神は牛頭天王である。江戸時代、小泉は上小泉村・下小泉村・若宮村の三カ村から成っており、下小泉村

の天王社（現若宮天王社）は、天保五年（一八三四）に大飢饉で疫病が蔓延した際、福寿山直至院の融誉上人が「宝印（牛王宝印）を祀れ」と告げたため、津嶋牛頭天王社（現津島神社）から御霊（お札）をいただいで祀ったものである。明治に入り下小泉村のうち西小泉と呼ばれる五区・六区が分かれたが、飢饉・疫病が流行ったため、明治三八



写真 2-6 西小泉天王神輿の折り返し地点

年（一九〇五）に改めて津島神社から御霊をいただいで、向原八幡宮境内に祀ったのが西小泉天王社である（小泉六区 二〇一九）。

向原八幡宮の天王祭に先立ち、青年が氏子地域の境の三カ所に注連縄を張ってシメ切りをしていたが、現在は神輿が折り返すのみである（写真2-6）。祭当日は神事終了後、五区と六区それぞれの神輿が神社を出発し、区内を巡りながら荒々しく練って災厄を払う。最後に二基の神輿は向田公園に集合する。ここで夏祭りの祭典が行われる。

なお、江戸時代に勧請された若宮天王社は、近郷近在で有名であったため、大宮の咲花区ではこの天王社の分霊をいただいで神輿に祀り、祭典を行っているという。

### 福石神社のワコゴリサン

城山区の福石神社は、通称ワコゴリサン（輪くぐりさん）と呼ばれ、七月三二日に祭典が行われる。祭りでは鳥居と社殿の間の参道に茅の輪を二基設置する。輪の大きさは、例年は一丈二尺（約三・六m）、閏年には一丈三尺（約三・九m）とし、青竹を芯にして周囲を茅で覆う。現在は、茅の入手が困難であるため、輪の大きさはやや小さくなっていく。茅の輪をくぐれば疫病にかからない、夏病みしないといわれている。福石神社では「『くぐり返し』はしない」と伝えられ、宮司を先頭にして氏子はまず鳥居をくぐり、二つの茅の輪をくぐると、輪の外側を通ってもう一度鳥居をくぐってから茅の輪をくぐる（写真2-7）。かつては、青年が芝居や映画を催し、夜祭りには夜店も出て大変にぎわったという（城山区 一九九六）。

江戸時代、福石神社は公文富士氏の屋敷の鎮守で、「福石子育市大明神」と称した。昔は「子どもの幸せの悪い家」つまり子どもが育たない、生まれてまもなく死んでしまう家では、「神の申し子」といい、子どもが生まれると氏神の福石神社の社殿内に生まれたばかりの赤ん

坊を納めて帰る。この時後ろを振り返って見てはならないといい、子どもの泣き声を聞いた近所の者が望月家へと知らせる。望月家は「神の申し子」のことを代々奉仕する家で、神酒と供物を供えて神前から授かった子どもをもらい受けてくる。近所の者を立会人とし、祝いの印に扇子一对を添えて子どもを生家へ遣わす。この時、子どもの名前を変えることもあるという（小金澤 一九三八）。このような拾い親の民俗は全国各地で見られたが、氏神の子どもとして一度生まれ変わり、改めて実の親の元に授けられるという福石神社の習慣は、当社が子どもの健やかな成長を守る神として古くから信じられていたからである。「神の申し子」の奉仕をした家は、ほかにも何軒かあったと伝えられている。



写真 2-7 福石神社のワコゴリサン

通常、茅の輪をくぐると、すぐにもう一度茅の輪をくぐり∞の字形に進む。しかし、福石神社では「くぐり返し」をしないので、一度鳥居の外に出る。

### お堂や寺で行う疫病退散祈願 木の花区地藏尊の祭典

子どもの守り神といえは地藏菩薩も同じである。地藏の祭りは旧暦七月二四日であるが、現在は新暦七月二四日か一月遅れの旧暦八月二四日前後に行われることが多い。

木の花区では、七月第一土曜日に地藏尊祭典が行われる。地藏堂は氏神山神社境内入口に祀られているが、かつては五〇mほどの堀川沿いにあり、その北側の橋を地藏橋と呼んでいたという。祭りは亀鶴山万松院の住職が読経をする中、歴代区長から参列者が焼香をする（写真 2-8）。住職が地藏菩薩の絵姿のお札を焼香の煙にかざし、参列者一同で「南無願地藏菩薩」を唱えて終了する。お札は万松院に版木があり、印刷したものが町内会ごとに全戸配布される。この日は子供会主催で子ども相撲が行われていたが、新型コロナウイルス感染症拡大以降廃止された。

木の花区の花区が地藏橋のたもとにあつたように、地藏菩薩は道祖神と同じくムラを守護する境の神であり、賽の河原で子どもを救済する仏として信仰されてきた。子どもを夏病みや事故から守ってくれる地藏の祭りには、子ども相撲が欠かせない催しだったのである。



写真 2-8 木の花区地藏尊祭典

## 上稲子池之谷の百万遍

上稲子の池之谷では、七月第一日曜日に観音堂で百万遍念仏を行う。かつては、毎年旧暦八月の田植えを終えた農休みの頃に行われていた。祭りの前に参道や堂内を清掃し、堂内の中央と四隅に竹の支柱を立て、支柱をつなぐ注連縄を張る。注連縄には五色の幣をつけ、本尊を祀る祭壇にも注連縄を張る。「奉納百万遍家内安全所」と刷られたお札を二〇枚程用意し、中央の支柱に下げる。このほかに、長さ二尺（約六〇cm）ほどの青竹に幣をつけ、目盛をつけておく。

まず「くにまき」といい、日本全国の神仏の名前を唱えて集め、その後太鼓と鉦に合わせて念仏を唱える。念仏を唱える回数、青竹の目盛で数える者が太鼓に合図を送る。かつては一日中、時によっては夜を徹して行っていたが、現在は太鼓の叩き手もいないため、太鼓と鉦を叩かず念仏を適宜行つてから直会をして散会する。念仏が終ると、中央に下げたお札と五色の幣は竹の枝につけて各戸が持ち帰り、魔除けとして戸口に飾る。

また、注連縄は集落の入口六カ所に張って魔除けとする（写真2-9）。



写真 2-9 上稲子池之谷の道切り

池之谷の後藤家には、安永三年（一七七四）の「念仏縁起之事」という文書が伝わる。そこには、尾張国春日郡田中の地藏堂別当止春が、閻魔王宮にて六字名号（南無阿弥陀仏）を唱えれば疫神が来ても逃げることができるとある。百万遍（念仏百万回）を申す（唱える）べしと教えられたとある。おそらく、この念仏聖が安永三年に疫病が流行した際に百万遍念仏を伝え、ムラのすべての入口に百万遍の注連縄で道切りをして災厄を防いだのであろう。

## 北山本門寺の御大事御本尊会

北山本門寺の御大事御本尊会は、七月土用丑の日に行われる。北山本門寺は富士山法華本門寺根源という日蓮宗の大本山で、重須にあるため重須本門寺とも呼ばれる。御大事御本尊会は、法要の後、檀信徒が御本尊の掛軸の下をくぐり無病息災を祈願するものである。御本尊の下をくぐる前後で、僧侶によって櫛の枝で背中・肩・腰などが叩かれ払われる。行事終了後、檀信徒には御大事御本尊御守と無病息災の雑穀米が授与される（写真2-10）。日蓮宗系の宗派で使用される御本尊とは、「南無妙法蓮華経」の題目の周囲に神仏や高僧の名を文字や梵字で記した法華曼荼羅のことである。

この行事の由来は次のようである。宗祖日蓮が佐渡の流罪を赦され、越後の陀羅尼村にやってくると、村で蔓延していた疫病退散の祈禱を頼まれる。日蓮が懐中から御本尊を取り出し祈願すると、たちまち疫病が鎮まった。後に、御本尊は身延山の日蓮に返却され、日蓮から弟子の日興に授与され、身延山を下りた日興により北山（重須）にもたらされた。御本尊は「御大事様」と呼ばれ、昔は御大事様をかがけて題目を唱えながら疫病退散の行脚で村中を回ったといわれている。日蓮宗寺院では病氣平癒の加持祈禱を盛んに行うが、御大事御本尊会は疫病退散に特化した貴重な行事だと言える。



写真 2-10 北山本門寺御大事御本尊会（北山本門寺提供）  
上：当日の様子 下：御守と無病息災祈願の雑穀米



写真 2-11 沼久保本妙寺清正公大祭

### 沼久保本妙寺の清正公大祭

沼久保の日蓮宗沼窪山本妙寺では、七月第四日曜日に清正公大祭が行われる。肥後熊本<sup>ひご ぐんま</sup>の領主で、熱心な法華信者であった加藤清正をセイシヨコさんと親しみを込めて呼び、諸願成就を祈願する信仰は日蓮宗信者を中心に全国に広く分布している。本妙寺の祭典も「清正公さん」と呼ばれ、第二次世界大戦前までは舟場の川原まち（日待、秋祭り<sup>ひまち</sup>のこと）、谷外の閻魔さん<sup>やまのま</sup>とともに、各町内を代表する祭りだった。青年が造花を作ったり、境内のクスノキから綱を張って提灯<sup>ちようちん</sup>を提げたりしてにぎやかな夜祭りだったという（沼久保区 一九九七）。現在は、

檀家を中心に信者が集まり、住職の読経と参列者の焼香が終ると、住職による加持祈禱が行われる（写真2-11）。終了後、境内の裏を下り本妙寺の元屋敷に行き、中興開基<sup>ちゆうきゅうかいき</sup>の石碑に線香を手向けて終る。なお、沼久保では盆行事に合わせて夏祭りが行われていたが、新型コロナウイルス感染症拡大以降中止となった。そのため、清正公大祭に合わせ沼久保の夏祭りを行っている。

### 自然災害を除け村内安全を願う祭り

#### 内房橋上の三十番神祭り

内房の橋上の八幡宮では、七月最終日曜日に三十番神の祭りが行われる。三十番神とは、一カ月三〇日間を毎日交替して法華経を守護する三〇の神々のことで、日蓮宗では絵像に描いたり彫像にしたりして祀る。橋上の三十番神は彩色が施された彫像群で、一神ずつ奉納者の名前が像の背後に墨書されている。かつて橋上には寛妙寺かんみょうじという日蓮宗寺院があり、その堂の裏には数十基の古碑があったという（内房うちら常高等小学校 一九二二）。八幡宮の境内には大正二四年（一九二五）建立の「三十番神山上廟社再興由縁」の石碑があり、次のように記されている。三十番神は八幡宮の背後の山上に祀られていたが、大正三年に八幡社・七面社・三十番神の三社を合祀したところ災厄があったので、旧社地に小祠しょうしを建立して神札を納め、山麓の神体とともに法楽を絶やさないようにした。

この碑文は内房の尾崎の本成寺ほんしょうじ住職が書いたものである。この頃、寛妙寺はすでに廃寺になっており、三十番神の祭りは本成寺が引き継いでいた。現在は、旧家である森家の当主が住職の代わりを務め、氏子の参列者が読経に参加する（写真2-12）。碑文にあるように、祭りは若い



写真 2-12 内房橋上の三十番神祭

人たちが山道の草刈りと祠の掃除を行い、八幡宮での祭りとは別に山上で祭りをしてくるという。橋上において三十番神の行事は氏神の祭りであり、村内安全を祈願する祭りなのである。

#### 内房の風祭り

秋は台風シーズンであり、各地で風水害や土砂災害に見舞われることが多い。立春から数えて二一〇日目を二百十日といい、この日は厄日あるいは荒れ日とされている。農山村地帯では、この二百十日を無事にやり過ごすことが重要であった。富士川流域周辺では風祭りといひ、この時期に穂を出し始めた稲が倒れないようにと願う行事が盛んに行われた。市内では内房の瓜島うりしま・仲・山口の各集落で風祭りを行う。瓜島では氏神の社前に、仲では宝鏡庵ほうきやうあんの前に注連縄を張り祭りを行う（増田 二〇三三）。

内房の山口では八月第一日曜日ひつひの午前に風祭り、午後には観音堂で観音講を行っている。注連縄は九〇mの縄を二本撚りよ合わせて太くし、山口川に張り渡す。その際、注連縄の中央付近にオリカケと呼ぶ神酒を入れた竹筒を下げる（写真2-13）。山口の風祭りは集落入口から川を挟んで対岸まで注連縄を張ることから、農作物を風水害から守ると同時に疫病をムラに入れないという道切りの意味も込められている。このような風祭りは、山



写真 2-13 内房山口の風祭りのオリカケ

梨県南巨摩郡富士川町や西八代郡市川三郷町付近まで確認することができる（山梨県 二〇〇三）。

### 粟倉石原の番屋

冬、乾燥した季節の火災は、町や村が丸焼けになるほど恐ろしい災害の一つである。現在、富士宮市の無形民俗文化財に指定されている内野の火伏念仏も、足形・内野の集落がそれぞれ大火に遭ったことから始まったと伝えられている。火災の要因はさまざまであるが、不審火ではなく野火によるものも少なくない。

粟倉の石原では、旧暦二月八日に番屋または番小屋と呼ばれる火伏せの行事がある。この日、朝からムラの男衆総出で、集落のほぼ中心部の道沿いに切妻型の小屋を作る。屋根と壁面を茅で作り、その表面をヒバ（アスナロ）で覆い上から竹で押さえる。棟には稲藁の束を載せ、そこに三本の白旗を挿す。小屋の脇には二本の竹を立て、その先端に一本は棧俵（俵の蓋部分）を、一本は藁束を結び根元に二つ折りにした注連縄を垂らしたものを取り付ける（写真2-14）。

番屋はかつて野火の見張り番をした小屋の名残で、天保八年（二八三七）一月に杉田村の山林火災で広範囲にわたって焼失したため、石原村・木伐山村・大岩村・下小泉村の四方村で入会山林を管理する体制が整えられた。番屋には常時番人が詰め、山林立入者の火道具などの所持品検査を行い、万が一出火した際には迅速に消火活動を行うことが義務づけられていた。この地域の山林は「富士山御林」として、公儀の管理下に置かれていたためである（渡井 二〇〇六）。

現在、番屋は集落内に作られているが、かつては集落内を通る富士登山道（村山道）を一・五kmほど登った山道沿いに建てられていたという。番屋に常住したのではなく、防火の巡回（火の番）をするための立寄り所だった。野火は失火だけではなく、野焼きや焼畑によって

類焼することもある。番屋の行事が現在まで続けられてきたのは、山村の暮らしの中で、防火は生産生業活動の一貫と認識されていたからである。



写真 2-14 粟倉石原の番屋

## 第二節 道祖神とどんど焼き

## 道祖神という神

市域で最も身近な神と言えば道祖神である。表2-1は、平成二五年（二〇一三）に富士宮市教育委員会が刊行した『富士宮市の道祖神 改訂版』で、旧芝川町域も含めて確認された道祖神、あるいは道祖神として信仰されている石造物の総数を地域別に示した一覧である。

静岡県内の道祖神は、県東部・伊豆地方の富士川以東に集中している。市内でも富士川以西である内房にはまったく見られないが、静岡市清水区の旧東海道由比宿に一基、山梨県境の穴原などに七基と、その数は極端に少ない。表2-1にあるように、市域の道祖神の種類（形状や像容）は、双体像が最も多く二一八基、次いで文字碑が一四七基とほかを圧倒している。また、日蓮宗系寺院が多い市域に特徴的な道祖神として、題目塔を兼ねたものが二基確認されている。造立時期では、最古のものが元禄二年（一六八九）の双体像で、最新のものが平成一六年（二〇〇四）の双体像である。造立のピークは、一八世紀末の天明から寛政期（一七八〇～一八〇一）の五〇基となっている。市域で最も多い双体像は、男女の神が合掌したり、盃や徳利を持ったり、手を取り合ったりする姿を浮彫りにしたものである。

道祖神は、ドウソジン・ドウロクジン・サイノカミ（塞の神）などとも呼ばれ、境や辻、集落の中心部などに建っている。路傍で災厄や疫病を遮る神であり、子孫繁栄と豊穰を願う神であり、子どもの健やかな成長を見守る神でもある。ムラ（村落）や集落、組（班）などの単位で祀り、小正月のどんど焼き（ドンドンヤキ）は「道祖神の祭り」であると考えている地域も多い。

| 地域／種類 | 双体  | 文字  | 単体 | 題目 | 自然石 | 総数  | 祭祀場 |
|-------|-----|-----|----|----|-----|-----|-----|
| 上井出   | 7   | 4   |    |    | 2   | 13  | 13  |
| 白糸    | 14  | 3   |    |    |     | 17  | 15  |
| 上野    | 35  | 20  |    |    | 2   | 57  | 45  |
| 北山    | 38  | 12  |    |    | 13  | 63  | 52  |
| 富丘    | 30  | 17  | 1  | 2  | 1   | 51  | 42  |
| 大宮    | 25  | 29  | 1  |    | 3   | 58  | 55  |
| 富士根   | 50  | 27  | 1  |    | 6   | 84  | 69  |
| 稲子    | 2   | 1   |    |    |     | 3   | 3   |
| 柚野    | 13  | 14  |    |    |     | 27  | 24  |
| 芝富    | 4   | 20  |    |    | 3   | 27  | 26  |
| 内房    |     |     |    |    |     |     |     |
| 合計    | 218 | 147 | 3  | 2  | 30  | 400 | 344 |

表 2-1 富士宮市域道祖神数一覧 祭祀場は道祖神を祀る場所の数で、1カ所に複数基祀ることもある。



写真 2-15 市内道祖神の例（左から双体・文字・単体・題目塔・自然石の道祖神）

## 小正月行事と道祖神

道祖神は全国に広く分布する。特に双体道祖神は、群馬県・長野県・山梨県・神奈川県および静岡県に集中しているが、その理由は不明である。この道祖神と深く関わりがあるのが、小正月行事である。山梨県では、一月一四日の小正月行事を道祖神祭りといっている。道祖神祭りはその名のとおり、道祖神を祭る行事である。ここからは、道祖神祭りの盛んな山梨県との交流が深い根原ねばらの小正月行事を紹介する。

根原は市域最北端の集落で、県境を越えると山梨県南都留郡富士河口湖町である。令和七年（二〇二五）現在の戸数は一三戸で、ほとんどが富士河口湖町本栖もとすの曹洞宗龍海山江岸寺りゅうかいさんうがんじの檀家である。正月には家の入口に一对の門松を立て、その間にザブトン（座布団）と呼ぶ松の枝を寝かせておく。これはお正月様が座る場所だとい、正月六日まで門松の支柱のクリの木の切口に餅を供える。吉川喜代晴氏きよはる（昭和一五年生）の家では、六日から七日に変わる深夜〇時に、小豆粥あずきがゆを神棚や門松に供える。七日の朝はマツオサメ（松納め）

といい、門松を抜いてどんど焼きの場所へ持っていく。門松を抜いた後のクリの支柱には、一四日の朝、一方にお飾りと呼ぶ色紙などで作った幣束へいそくを挿し、もう一方には三つ又の木にどんど焼きで焼く団子を挿して小豆粥を供える（写真2-16）。また、このほかに繭玉まゆだまといい、米粉の団子に食紅などで



写真 2-16 根原の小正月飾り

色を付け、枝振りの良い木の枝に挿して玄関や神棚・仏壇・床の間などの神仏に供える。

根原集落の北端に道祖神などの石造物が祀られており、その背後の空地でどんど焼きが行われる。正月の松飾りや古いお札類を集め、コヤと呼ばれる切妻型きりつまの小屋を作る。また、ヤナギと呼ぶ飾りものも作る。これは、長さ一二尺（約三・六m）の割竹に五色の色紙を貼り、一二本二組（二四本）用意する。写真2-17のように、長さ約9mの杉の柱に飾り付け、氏神うじがみの幟のぼし立てのぼしだてに立てる。かつては、青年が小豆や玉蜀黍とうもろこしを布で包んで作った木偶でくと呼ばれる人形をいくつも吊したという。

どんど焼きは、一四日夕方に行う。このとき、各家で団子と幣束を持参し、幣束は燃やしてしまい、団子はどんど焼きの火で焼いてその場で家族で分け合って食べる。幣束は、かつて根原で行われていた大念仏だいねんぶつの幣束の名残であり、現在でも本栖の江岸寺では一月一四・一五日に大念仏が行われている。どんど焼きの火で炙った団子を食べると、一年間風邪を引かない、家族が無病息災で過ごせると信じられている。



写真 2-17 根原のヤナギ

なお、ヤナギは一月二〇日に片付け、ヤナギの竹は一本ずつ輪にして各戸と氏神、消防小屋に配り、それぞれ屋根の上に投げ上げて火伏せの呪いとする（写真2-18）。

根原の小正月行事は、県境を越えた山梨県各地の道祖神祭りの影響を受けていると考えられる。ヤナギの柱に吊す木偶人形は、山梨県郡内地方（南北都留郡周辺）のホウコウ（這子）と呼ばれる人形と同じ呪い物である。ホウコウは御神木にくくり付け、御神木倒しの日に子授けや安産を願う女性たちがもらい受け、子どもが授かる和新たにホウコウを作り奉納する。根原では、ヤナギ倒しの日に木偶人形を奪い合い、神棚に上げて願い事をしたという。道祖神は、ヤナギやゴシンボクまたはオシンボク（御神木）と呼ばれる柱を依代にしてやってくる子孫繁栄の神であり、厄払いの神であると信じられているのである。

### どんど焼きの諸相

どんど焼きを行う場所は、道祖神の前や辻、広場などである。

粟倉の二又東では道祖神を祀る広場をドウロクジンバといい、そこがどんど焼きの場所であった。正月の門松や神々の古いお札、ダルマなどを集め、中心に心棒を立ててその周りに巻き付けたものをドンドヤと呼び、なるべく大きなドンドヤを作る。また、これとは別にダシ（出し）またはヤナギと呼ぶ飾りものも作った。太くて長いマダケを切ってきて、その先端を八つ割にし、三角の赤い紙を飾り、それを柱の先に縛り付けて八方に垂らし、近くの広場に立てた。ドンドヤに点火するのは夕方、人々はそれぞれ団子を持ち寄って焼く。また、この火で習字の紙を燃やし、燃えながら天高く上がると字が上達するといわれた。

どんど焼きの火が鎮まると、若者が燃え残っている心棒を隣の村



写真 2-18 火伏せのヤナギ



写真 2-19 火に投げ込まれる道祖神  
(山宮の下蒲沢)

の方角に向けて倒す。この村に悪霊が入ってこないよう、隣村に追い払うのだという。また、燃え残った門松の枝を持ち帰り、屋根の上に投げ上げておけば火事に遭わない、翌一五日の朝の小豆粥を炊くときに燃やせば無病息災だと信じられていた。一四日に立てられたダシは、次郎の朔日（二月一日）に片付ける。ダシにつけた割竹は、適当な長さに切って各自が持ち帰り、養蚕用の簀にする。蚕が順調に育つといわれた（富士宮市教育委員会 二〇一三）。

市内には、道祖神をどんど焼きの火の中に投げ込む習慣がある集落もある（写真2-19）。あるいは、どんど焼きのヤマを作るときに、あらかじめ道祖神を中に入れておき火を付ける。火の中に投げ込んだり、入れたりすると道祖神は欠けてしまうので、別に自然石を祀っておき、それを火の中に投じる所もある。村山の堀込では火傷をしない呪いであるといい、宮原では道祖神が村人の罪や子どもたちの疫病を背負って焼かれるのだという（宮原区 一九九七）。

道祖神が祀られていなくても、どんど焼きなどの小正月行事は行われる。内房は地域の最南端に位置し、平成二二年(二〇一〇)に芝川町が富士宮市に合併する前は富士郡芝川町内房、昭和三二年(一九五七)に芝川町が発足する前は富士郡富原村内房、昭和三一年(一九五六)九月二九日までには庵原郡内房村であった。内房は、市域で唯一富士川右岸(西岸)に展開する地域であり、道祖神が祀られていない地域でもある。内房の一五町内会のうち瓜島・仲・廻沢などでは、どんど焼きが行われる。村落内を流れる稲瀬川の河原や広場で、竹や木材、廃材などを積み、そこに正月の松飾りやお札類、ダルマなどを飾り付ける。瓜島のどんど焼きのヤマはかなり大きく、高さ一〇m以上あるかと思われる(写真2-20)。瓜島町内だけでなく、どんど焼きを行わないほかの町内会の人たちもお飾りを持ち寄り燃やす。

この地域のどんど焼きの特徴は、どんど焼きのヤマの心棒に長い竹を立て、その先端付近にダルマを吊すことである。納められた古いダルマはすべて吊す。市内各地でも同様だが、貫戸ではこの古いダルマがないとどんど焼きのヤマは完成しないとまでいう。

また、市内のほぼ全域のどんど焼きで共通するのが熾火になつてから焼く団子である。市域の多くのどん



写真 2-20 瓜島のどんど焼きのヤマ

ど焼きでは、うるち米の粉(上新粉)で作った団子を三個、サンボンヤリ(三本槍)と通称する三つ又の木(樹種はさまざま)に挿して焼く。一方、内房村が所属していた庵原郡は現在の静岡市清水区域の大部分を占めていた。その清水区に境を接している瓜島では、団子ではなく菱形、あるいは四角形の餅を竹竿の先に挿して焼く。これは、静岡市内の各地のどんど焼きで見られるものである。このように、市域ではさまざまな小正月の祭りやどんど焼きが行われる。

最後に、どんど焼きにまつわる白鳥山の白坊主伝承を紹介する。内房の北側に白鳥山という標高五六七・七mの山がある。白鳥山は江戸時代から大地震や豪雨による山崩れをたびたび繰り返し、麓の橋上では何人も犠牲者を出してきた。宝永四年(一七〇七)の大地震では、白鳥山の山崩れの土砂は富士川を越えて左岸(東岸)の長貫まで達し、供養塔によれば二三人もの犠牲者を出したとされる。

図2-2は、白鳥山周辺の集落とどんど焼きの関係を示したものである。「白鳥山が見えるところではどんど焼きを行ってはいけない」という禁忌伝承があり、富士川右岸(西岸)地帯では現在もどんど焼きが行われていない。白鳥山は白坊主や天狗が出現したり、白鳥が飛来したりする山で、そのような不思議な現象があると伝染病が蔓延する、どんど焼きの火で火災が起こるなどといわれた。白鳥山は山梨県と静岡県の県境にまたがってそびえている山であるが、静岡県側では甲州武田軍の狼煙台が白鳥山にあり、その火と間違えなように村にどんど焼きを禁じた、という言い伝えが流布している。

富士川左岸で唯一、上長貫はどんど焼きの禁忌伝承があったが、現在はどんど焼きを行っている。上長貫ではどんど焼きを行ったら白坊主が出たので、村人が確認しに行ったところ白蛇の抜け殻だったという。白鳥山の白坊主や白蛇の出現は、全国の土石流常習地帯でよく語られる災害伝承の類話である。白鳥山の災害伝承とどんど

焼きが結びつく理由は不明であるが、富士川に遮断され、かつ県境に接している地域の民俗として注目される。

### 夏の道祖神祭り

道祖神の祭礼は、小正月以外にも行われる。『富士宮市の道祖神改訂版』によれば、青木の阿原口新道、淀師区の八つの町内会、淀川町の田町、宮本区、神立区かんだての各地で祀る道祖神では、七月あるいは八月にも祭りを行う。この時期、夏の疫病除けを祈願する行事として天王祭てんのう（祇園祭ぎおん）があるが、この道祖神の夏祭りも同様の目的で行われていると考えられる。特徴的なのは、市内に最も多い日蓮宗寺院が関わり、題目を唱えたり、小正月のどんと焼きのような火焚きを行ったりすることである。前節でも触れたように、日蓮宗では夏の疫病退散を祈願する加持祈禱の行事が多い。一方で、富士山本宮浅間大社と関わりの深い宮本区と神立区では神式による祭りが行われている（写真2-21）。

これら夏の道祖神祭りを行う地域には、その分布に偏りが見られる。おそらく過去に夏の疫病が流行った地域であり、それは共通の生活用水を利用した地域であると考えられる。渋沢用水は、淀師の湧水を水源としており、市街地のほぼ全域を潤す用水である。また、西新堀用水も、淀川南公園の下川から取水し、社領地の水田開発のために開削された用水である。渋沢用水と西新堀用水は、市街地を流れるいくつもの堀・小川の源になっており、開発が進むにつれ生活用水や防火用水として使われるようになったという（富士宮市教育委員会 二〇二〇）。このことから、灌漑用水かんがいが生活用水として使われたために汚染されるようになり、夏の流行病が蔓延したことで、この流域の町が疫病退散を願って行ったのが夏の道祖神祭りなのではないだろうか。



写真 2-21 神立夏の道祖神祭り

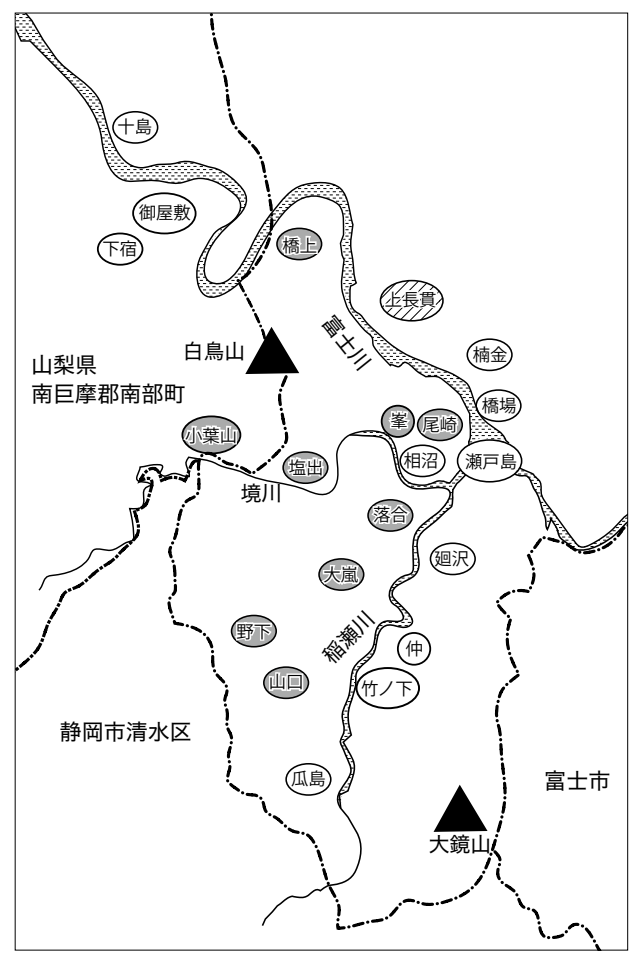


図 2-2 白鳥山周辺のどんと焼き分布図

| 凡例 |                            |
|----|----------------------------|
| ○  | どんと焼きを行う集落                 |
| ●  | どんと焼きを行わない集落               |
| ◐  | どんと焼きを行っていなかったが、現在は行っている集落 |

## 第三節 盆行事と川供養

### 先祖を祭る盆行事

七月は盆月ぼんづきといい、先祖祭りをする月である。富士宮市域では一カ月遅れの八月が盆月となっており、特に一三日から一五日、あるいは一六日までの期間、先祖を迎えて送る行事が家ごとに行われる。その様子について、『沼久保区誌』に次のように記されている。

まず盆道作りといい、先祖を迎える準備として墓地から家までの道の草刈りをする。七日の七夕は、仏具を清め、墓掃除をする日である。精霊棚しょうりょうだなは、仏壇の前にヤマトダケで棚を作り、ナスの馬と里芋・サツマイモ・豆・トウモロコシなどの畑作物を供える。オミナエシは盆花ぼんばなといい、先祖の魂がこの花とともにやってくるという。

一三日の夕方、墓参りに行き、墓前で迎え火を焚いて先祖を迎える。この頃に羽化する赤トンボは盆トンボといい、先祖が乗ってくるといわれた。子どもたちは屋外に竈かまどを作り、共同で飯を炊いて食べるボンガマ（盆竈）が昭和の初め頃まで行われた（沼久保区一九九七）。

また、内房うちぶきの盆行事について、『内房村誌』に次のようである。

七月七日の夜から盆灯籠とうろう（なければ岐阜提灯ちよちん）を出して七月中毎日点火し、八月一日朝に点火して終わる。一三日から盆祭りで、座敷かまどに茅かやを敷いて仏壇を別に作り、先祖の位牌いはいを飾り、果物・穀類・野菜類などを供える。一四日には墓参りに行き、香花こうばなを供えてくる。また親類や近隣に新盆の家があれば、その家を訪れて香花を手向けたむけてくる。一三日から家毎に松明たいまつを燃やし、墓地でも燃やし、一六日夜まで行う（内房尋常高等小学校 一九一三）。

このように、盆行事では家々で先祖を迎える準備をし、先祖を祭る盆棚を作り、盆花と呼ぶオミナエシや香花を手向けてきた（写真

2・22）。現在、内野うちのの横手沢の志村家でも盆棚にナスの牛とキュウリの馬を飾り、外庭にムエンボトケサン（無縁仏さん）と呼ぶ祭壇を設けている（写真2・23・24）。

日本では、盆棚にその季節のさまざまな作物や稲の若苗を供える。盆行事は、先祖の霊に農作物の豊作を願う儀礼ともなっているからである。また市域では、自家の墓地に香花やオミナエシなどの盆花を供える一方で、親類や近隣の家の墓参りに小型の塔婆とうばを立てる習慣が平成に入ってから広まっている（写真2・25）。

一三日に迎えた先祖は、一六日の朝早く送



写真 2-22 盆花のオミナエシと香花



写真 2-23 横手沢の盆棚  
茅の上にナスの牛とキュウリの馬を飾る。



写真 2-24 ムエンボトケサン  
盆花はミソハギ。

り火を焚いて送る。盆棚に飾った牛や馬・供物・屋外のムエンボトケサンなど、村境や川の橋のたもとなどに、盆棚に敷いた茅に載せて置いてくる。本来は棧俵さんだわなどに供物を載せて川に流していたが、現在は河川環境の問題から流すことはほとんどしない。県内各地でも、先祖の霊（精霊しょうりょう）は川や海に流して、速やかにあの世に帰すことが行われてきた。なお棧俵とは、米俵の円形の蓋かたのことで、水田地帯で稲藁わらを利用して作られるものである。

## 盆の火祭り

盆期間に行う火祭りは、日本各地で見られる。先祖を松明で迎える迎え火、そして松明で送る送り火は、現在でも広い地域で家毎に行われている。それをムラ（村落）共同で行う火祭りが、振り松明・投げ松明・百八灯などと呼ばれるものである。『内房村誌』には、盆に行われるヒヤクハツタイ（百八灯）と子どものナゲダイマツ（投げ松明）、呼称は記されていないが、ほかの地域でカワカンジョー（川勧請、川灌頂）、カワカンジー（川勧進）と呼ばれる行事についての記述がある。

稲瀬川の川原では一四日から一六日まで百八灯を吊るし施餓鬼せがきを行う。また、子どもたちは高い棒に麦稈むぎから（麦藁）で編んだものを載せ、そこに松明を投げ入れて遊ぶ。一六日には、直径一間半から二間半（約二七〇～四五〇cm）の麦稈の輪を作り、中央に麦稈の柱を立てたものを作り、僧侶の読経の後、これに点火して富士川に流す。これとよく似た行事が、山梨県南巨摩郡南部町にもあった。七月一三日から一六日まで毎晩、若者連中が松明を投げ上げて空中で打合せ、最後に蜂の巣という受けに投げ入れて大喝采を浴びるといふものである。また、富士川の同町南部川原は対岸の同町内船うつなふねと相対して、六百間（約一〇九一m）くらいの距離に百八灯と呼



写真 2-25 盆の墓の小型の塔婆



写真 2-26 上長貫の投げ松明（2015年）

ぶ松明を並べ、一斉に点火するという（南部町誌編纂審議会一九六四）。現在、この百八灯は富士川の河原で行われている南部の火祭りとして有名だが、ここでは投げ松明も行われている。

市域では平成二七年（二〇一五）まで上長貫かみながぬきで投げ松明を行っていた（写真2-26）。また、沼久保でも夏祭りのイベントとして投げ松明を行っていたが、新型コロナウイルス感染症拡大を機に夏祭りが中止されて終了した。

静岡県内でも、一〇m以上の支柱に漏斗ろうと状の高灯籠たかどうろうを立て、下から点火用の松明を投げ上げる行事が河原や海岸で見られる。安倍川支流の藁科川わらしな中流域でアゲドウロウ、大井川下流域から瀬戸川・朝比奈川流域、吉田町・牧之原市海岸部ではアゲンダイ・アゲダイ、焼津市海岸部ではトウロンなどと呼ばれる。

これらはすべて一連の盆行事として行われ、多くは先祖を祭った

り送ったりする篝火であり、小正月のどんと焼きと同じく祖霊を送る火の意味がある。ところが、富士宮市域の川の流域には、祖霊を送るための火祭りのほかに、水難者供養を目的とする火祭りがある。

### 川供養のカワカンジョー

一般的に、盆行事は民間の先祖祭りに仏教行事である盂蘭盆会が習合した行事と考えられている。そのため、盆の期間に檀那寺では施餓鬼会（施食会）と呼ばれる有縁無縁三界万霊の供養を行う。あの世からやってくるのは、先祖の霊（祖霊）だけではなく、祀る子孫のいない諸霊（餓鬼・無縁・法界）も供にやってくる。天災や飢饉などで不慮の死を遂げた無縁仏に対して、各寺院ではその冥福を祈るために施餓鬼を行うのである。特に、この一年のうちに亡くなった新霊を祭る新盆・初盆には、この諸霊が招かれなくてもやってくる。この新仏供養と水難者の施餓鬼供養（川供養）を同時に行っているのが、富士川とその周辺河川流域の川流し行事である。

表2-2は市内の水系ごとに分けた盆の火祭りと川供養行事の一覧である。市域でも富士川本流と支流の芝川・稲瀬川、稲瀬川の支流の境川、そのほか潤井川では、川での溺死者や洪水災害での水死者の供養が行われ、地域の寺院や檀那寺の住職による川施餓鬼の法要が営まれている。内房の尾崎では、この川供養をカワカンジョー（川灌頂）といい、麦稈の造り物もカワカンジョーと呼ぶ（写真2-27）。カワカンジョーの中心には新盆の家の提灯を掲げ、「富士川河川仏故之諸霊位」と墨書された塔婆を挿す。日蓮宗長遠山本成寺の住職による川施餓鬼の法要が行われ、子どもたちの松明を先頭にしてカワカンジョー・住職・十二日講（題目講のこと）が続いて行列を組み、尾崎の主要道路を巡ってから富士川の河原へと下りる。ここで住職が読経する中、カワカンジョーに点火して川に流している



写真 2-27 尾崎のカワカンジョー



写真 2-28 大北のカワカンジョー（2009年）

| 水系        | 大字  | 地域  | 投げ松明 | 川供養 |   |
|-----------|-----|-----|------|-----|---|
| 芝川        | 内野  | 足形  |      | ○   |   |
|           | 大久保 | 大久保 |      | ○   |   |
|           | 上稲子 | 上稲子 | △    |     |   |
| 富士川<br>本流 | 長貫  | 内房  | 橋上   | △   | △ |
|           |     | 上長貫 | ○    | △   |   |
|           |     | 川合  | △    | △   |   |
|           |     | 橋場  | △    | ○   |   |
|           |     | 楠金  | △    |     |   |
|           | 砂原  | △   |      |     |   |
|           | 内房  | 尾崎  | ○    | ○   |   |
|           | 羽鮒  | 舩島  |      | ○   | ○ |
|           |     | 月代  |      | ○   | ○ |
| 古田        |     |     |      | ○   |   |
| 沼久保       | 舟場  | ○   | △    |     |   |
| 稲瀬川       | 内房  | 仲   | △    |     |   |
| 廻沢        |     | △   |      |     |   |
| 相沼        |     | △   |      |     |   |
| 境川        |     | 落合  | △    |     |   |

表 2-2 盆の火祭りと川供養行事一覧

平成 25 年（2013）現在の調査を元に作成。○は実施、△は中絶。

だが、現在は河原で燃やしてしまう。

『駿国雑志』巻之十五下の七月一六日の項には、富士川左岸の沼久保の舟場で行われていたカワカンジョーの様子が次のように記されている。

今宵富士郡沼窪村不二川舟場施餓鬼あり。其仕業長一間計りの破り竹を三角に曲げ、麦藁にて太く巻き、其三角毎に幣束を立て、角より角に竹を遣り違ひに入れ、麦藁にて初めの如く巻き、四尺計りの竹を細く割り、縄にて結び炬火となし、その遣り違ひの真中に立て、火を放ち焼立、法華経の首題を唱へ、水中に流し遣る。すべて僧家此事に関からず舟場の所業たり。號て河灌頂と云、是流死の冥福を修する也。当村悉く法華宗のみ、故に他家の仏事なし。

現在、尾崎で流している造り物と土台部分は異なるが、中心に松明を立てて点火し水に流すこと、「河灌頂」は川流れの死者の冥福を祈る行事であること、法華宗の檀家関わっていることなどが共通点である。すでに舟場では行われなくなり、対岸の大北（現富士市北松野）で行われていたカワカンジョーも中絶しているが、中心の柱に火を付けて流すタイナガシ（松明流し）であった（写真2-28）。日本三大急流の一つである富士川では、川を使って物資を運ぶ舟運（タテナガシ）と右岸と左岸を結ぶ渡船（ヨコナガシ）が基本的な交通手段であった。特に長貫の橋場には釜口峡と呼ばれる富士川有数の難所があり、多くの水死者を出してきた。水難者が出るたびに渡船場の船頭たちは捜索に駆り出されたが、遺体が見つからないことも度々であった。このような非業の死を遂げた無縁仏を毎年供

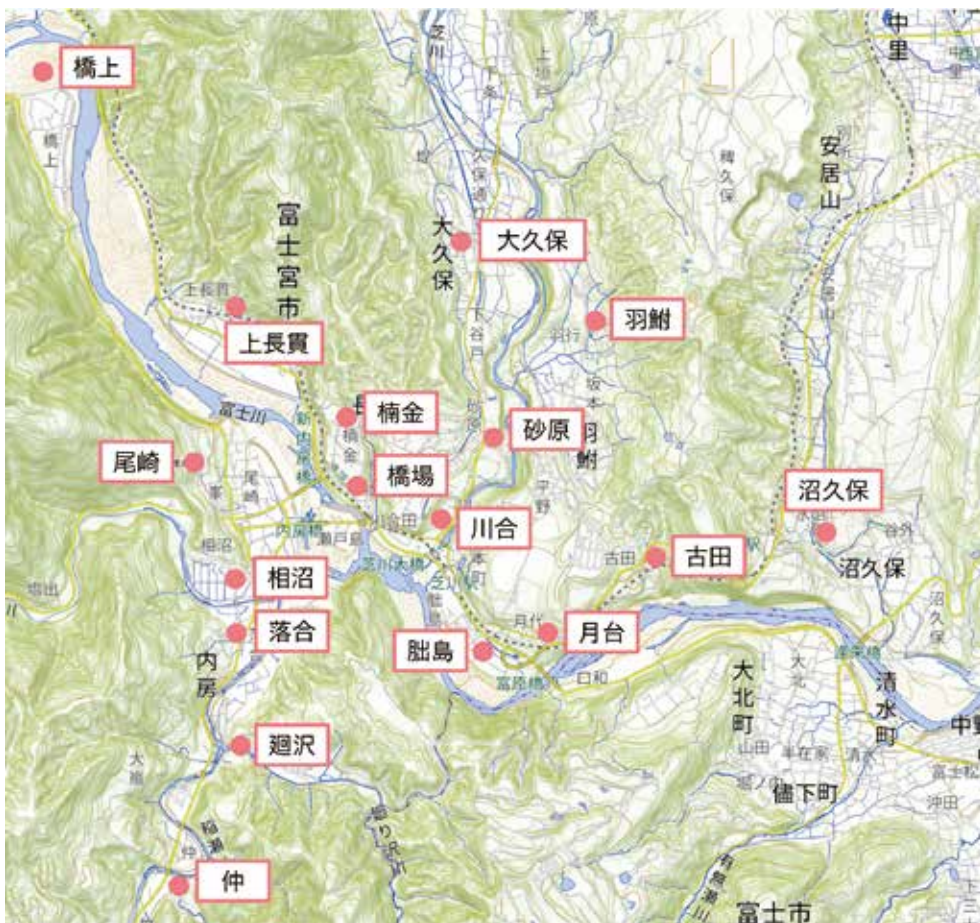


図 2-3 富士川および支流流域の川供養の分布（地理院地図 Vector を利用して作成）

養するのが、この地域のカワカンジョーであった。沼久保では、カワカンジョーのほかに川供養の百八灯も行われていた。

一方、富士川以外にも川供養行事がある。芝川流域の内野では足形の河原で、区の夏祭りとして川供養を行っている。芝川は猪之頭付近の湧水を源とし、南流しながら川幅を広げ、長貫の川合で富士川に合流する。足形の芝川に架かる橋を鬼橋といい、鬼橋右岸の曹洞宗大安山法蔵院には川施餓鬼の縁起が伝わる。

法蔵院はかつて天台宗宝蔵庵という寺院であった。最澄（伝教大師）が富士登山に赴く途中、この地で三伏（夏至後の酷暑）の炎熱のため身動きがとれない大蛇の苦しみを法力によって救った。この日が大同四年（八〇九）七月一六日で、以来川施餓鬼が行われるようになったという。最澄は携えていた地藏菩薩を村人に授け、村人は北谷戸に御堂を建てて祀った。また、この日最澄は大蛇潜伏の芝川淵辺に弁財天の三文字を書いて祀り、村人に弁財天を信仰すればこの地において干ばつや水害があっても憂いはないであろう（被害はないであろう）と諭した。その後、最澄は富士再登山の際にもやって来て弁財天の像を彫刻し、それが現法蔵院の重宝（宝物）として祀られている。その後、御堂を大安山宝蔵庵と改名したという（法蔵院一九七四）。

現在、内野では月遅れの八月一六日に、カワカンジョーと呼ぶ造り物に火を付けて流す行事を行っている。モウソウチクを円形にした土台に、同じモウソウチクで心柱を立て、その周囲もモウソウチクで覆う。これに各家から納められた盆の飾りものや供物、ムエンボトケサンなどを飾り、上部にタツ（竜）を取り付ける。タツは稲藁と白



写真 2-29 内野のカワカンジョー

布で作り、頭は口を開けた状態で赤い炎に見える棒を仕組む。これはカワカンジョーの由来となる大蛇を模したものだという。内野では六斎衆という念仏講があり、法蔵院で施餓鬼の法要が営まれた後、六斎衆がオクリネンブツ（送り念仏）を唱える。住職・六斎衆に続いて、施餓鬼幡を持った区長などの役員が行列を組み、境内を時計回りで三周回した後、山門を出て鬼橋まで行く。住職が橋の上でカワカンジョーに向かって読経し、寺から持参した施餓鬼幡が川に投げ入れられるのを合図に、カワカンジョーに点火する。カワカンジョーには曳き綱がつけられ、青年たちによって火が付いたまま川の中を何度も曳き回される（写真 2-29）。

鬼橋付近では川床が深く、青年も足が付かないほどであった。そのため、上流の岩盤を削って川の流れを緩やかにしたこと、川床が上がり水深が浅くなった。この上流には長者淵という深い淵があり、子どもも大人も深みにはまって亡くなっている。鬼橋付近は遺体が引つかかる場所であったといい、カワカンジョーは川で亡くなった人を供養するためのものと伝えられている。

## 第四節 内野の火伏念仏

## 火伏念仏の伝承地

火伏念仏は、かつて内野・足形それぞれの集落で大火があり、集落の復興と火災から逃れることを願って始められたと伝えられている。御幣で部屋中を飾り、この飾りの下に祭壇を設え、六斎衆と呼ばれる人々が太鼓や鉦を叩きながら唄うように念仏を唱えて、火除け、厄除けを祈る。

足形の伝承では、氏神の熊野権現からの不審火によって集落中が焼き尽くされ、その後氏神が再建されたとされる。その神社に残る棟札に記された年が貞享元年（一六八四）極月（十二月）であることから、その頃から始められたのではないかと考えられている。足形（現内野区一町内）では、火災に遭ったとされる三月一四日にトウヤ（当屋）で火伏念仏を行ってきた。また、内野（現内野区二町内）と佐折でも、一月一八日にそれぞれトウヤで火伏念仏を行ってきたが、佐折は六斎衆がいなくなったため現在は行われていない。

令和七年（二〇二五）現在、火伏念仏は内野区の行事として足形と内野合同で行われている。日程は、一月一八日と三月一四日の二回で、祭場に御幣などを飾る行事は年一回で、一月と三月を交互に行う。平成三十一年（二〇一九）からは希望する家がない場合には内野区民館で行うようになった（写真2-30）。

この火伏念仏は、平成十一年（一九九九）に富士宮市の無形民俗文化財に指定されている。



写真 2-30 飾り付け（内野区民館）

## トウヤ（当屋）と祭場さいじょう

火伏念仏は、新築や改築、茅葺かやぶきの屋根替えをした家で、火伏祈禱を希望する家をトウヤとする。トウヤの六〇八畳の広さがある座敷などの部屋で火伏念仏が行われる。

昔の屋根は茅葺屋根であったことから、定期的な屋根の葺き替えが必要であった。以前は集落の中で順番に行われていた屋根の葺き替えも、茅葺屋根がなくなった現在では行われない。また、毎年のように新築する家があるわけでもない。こうした現在の住宅建築の事情からトウヤとなる家が限られ、火伏念仏は毎年は行えなくなってくる。

現在はこうした事情に合わせて、新築したり、火除けを祈念したいという希望が家主からあったりする場合にトウヤで行い、トウヤがない場合にはムラ全体の火防を願って区民館で行っている。新型コロナウイルス感染症の流行の間も規模を縮小して継続してきた。

区民館は集会施設であり、一般の家より空間が広いことから、八畳程度の空間を再現する櫓ぐらを組んで祭場をつくる。この櫓は、平成三〇年（二〇一八）に作られた。組んだ櫓には、注連縄しめなわをかけて御幣を取り付ける。この櫓の下、御幣が付いた注連飾りの空間で念仏が行われる（写真2-30、図2-6）。

一般の家で行う場合は部屋の四方の長押ながしの上に飾りを取り付けるための木材を置くか、区民館で使用している櫓を持ち込んで行われる（写真2-31）。

令和七年には、地域内にある観光施設のまかいの牧場で新築施設のための火伏念仏が行われた。施設の二階テラス部分で行われたため、こうした場合にも櫓が使用されている（写真2-32）。

## 六斎衆の役割

火伏念仏は、内野区内に住む人々で構成された六斎衆が執り行う。この六斎衆は、大念仏だいにんぶつと言われる火伏念仏と、現在も行っている小念仏せんにんぶつと言われる法蔵院（内野）の川施餓鬼かわせがきの送り念仏、現在も行わなくなってしまうが出棺時の送り念仏や、法事の際の念仏などを行っていた。

この六斎衆は、自宅葬時代、内野区の各家の葬式に関わっていたことから、六斎衆の高齢化で人数不足になった際に、各班から六斎衆を募り一六人となった。しかし再び人数が減り、現在の六斎衆は、班長に推薦された人や、自主的に参加を希望した人、離職後に地元でUターンした人たちによって七人で構成されている。そして、その葬儀の時に念仏を唱える六斎衆が、大念仏といわれる火伏念仏を



写真 2-31 一般家庭での様子



写真 2-32 まかいの牧場での様子

執り行う役割も担っていた。弔いに関わることや、火伏というまじないに関わることからか、地域の人に生き神様と呼ばれている年長の六斎衆も存在している。

六斎衆の役割は、共同体の中から選ばれることから、現在の区長や班長といった地域の役割と同じように考えられていた。その一方で、祈りを捧げるといふ役割から特別な力を得る人々とも考えられていたようである。(写真2-33)。

### 祭壇の設えと六斎衆の位置

祭壇の正面奥には阿弥陀如来、観世音菩薩、勢至菩薩の阿弥陀三尊の掛軸を掛け、その前に台を置いて中央に酒、左右に塩と洗米を、その手前側にいくつかの供物を置く。供物は山の幸、海の幸、餅である。魚は中央に、掛軸側から見て頭が左になるように置き、餅の左右には灯明を上げる(図2-4)。

太鼓が横に三つ並べられ、それぞれの太鼓の前に座布団が敷かれる。六斎衆のうち太鼓の三人まではこの飾りがある空間の中に入る。また、太鼓の後ろには鉦を叩く人が座る。中央の太鼓の人の真後ろに座る人は、念仏を何回唱えたか数え、太鼓を叩く人に合図を送る。この人のことを通称マッチ棒と呼ぶ。鉦を叩く人は飾りのある空間の外に出てしまいが、鉦は飾りの内側に置く。



写真 2-33 六斎衆 (内野区民館)

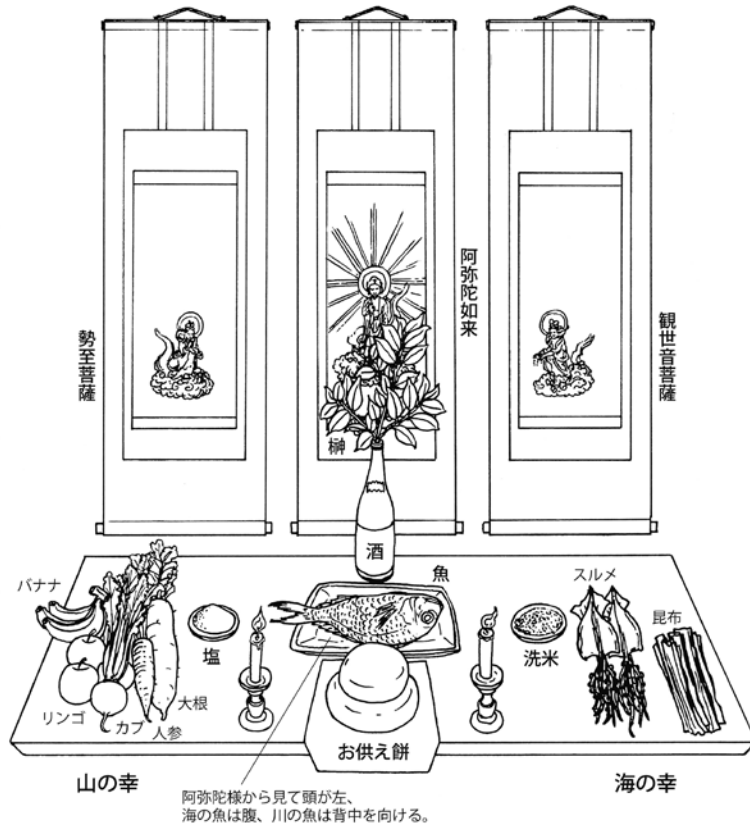


図 2-4 祭壇

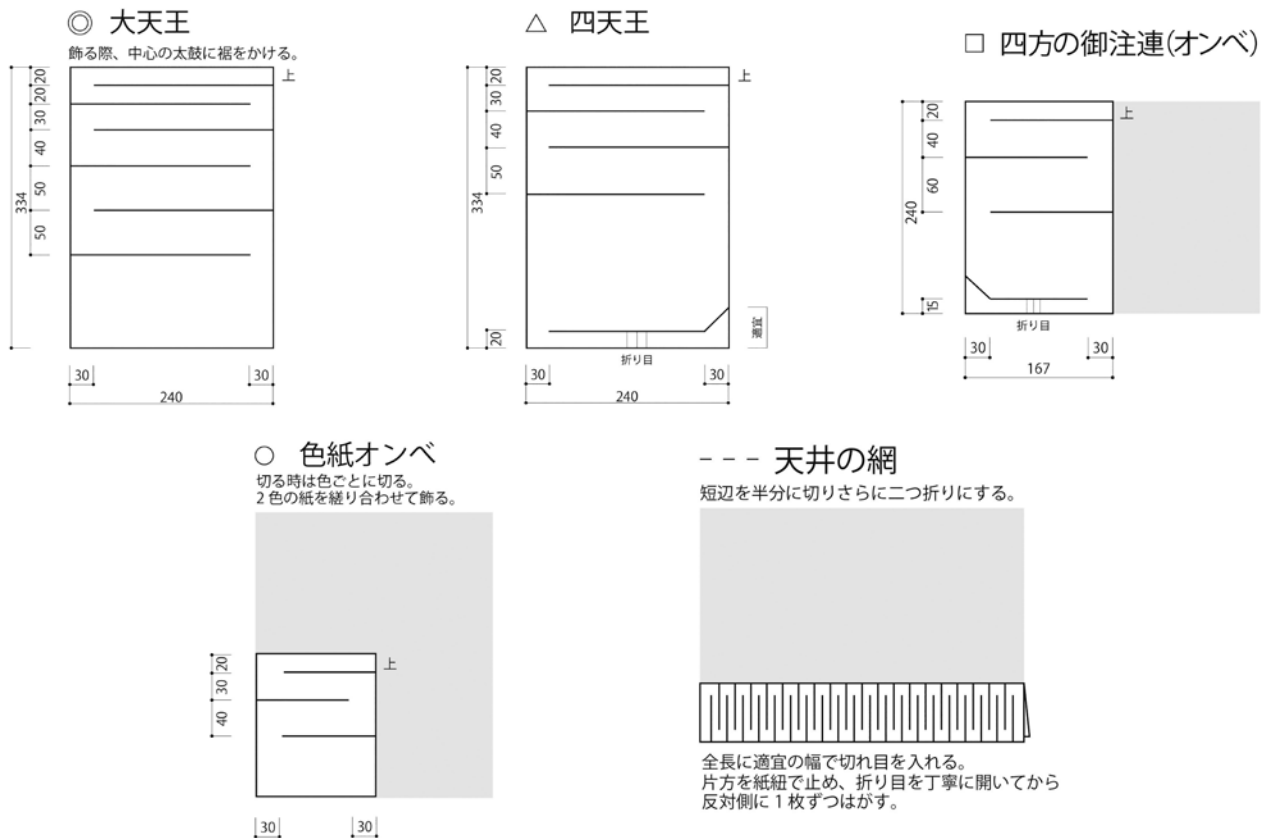
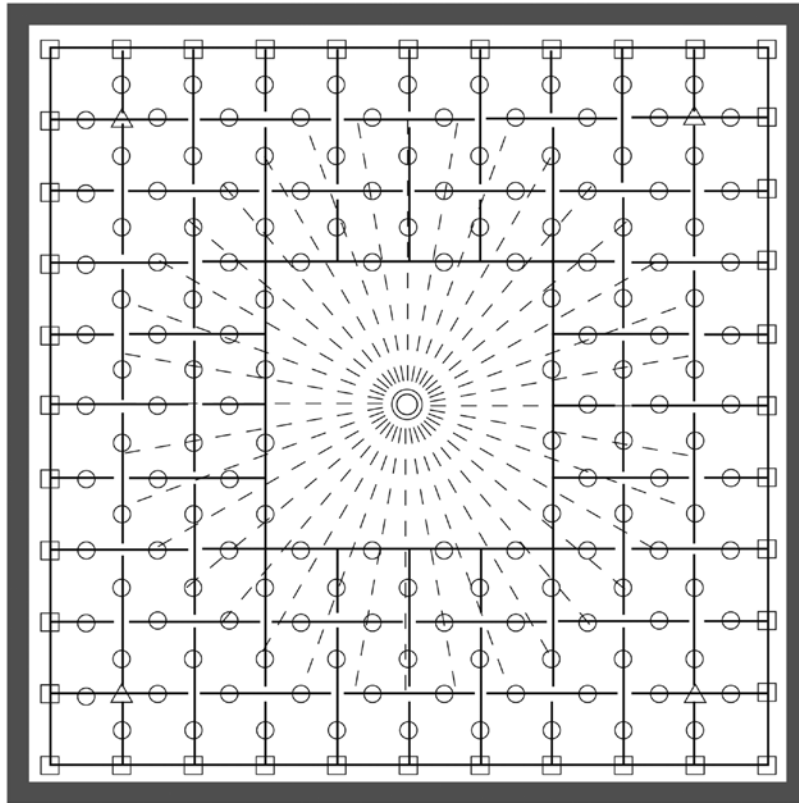


図 2-5 御幣の紙切り図

## 火伏念仏天井飾り設置図

1辺を10等分 縄11本、中心部を空ける。



縄取り付け用の45mm角材を4辺に設ける。  
角材に釘を等間隔に打ち、御注連用藁縄を固定する。

- 縄：藁縄を少しゆるめに手でない、縦と横11通り設置する。
- ◎ 大天王：半紙20枚（1丈）
- △ 四天王：半紙10枚×4ヶ所\_計40枚（2丈）
- 四方の御注連（オンベ）：半紙1/2を2枚吊す×40ヶ所\_計40枚（2丈）
- 天井の色紙オンベ：色紙1/4を2枚吊す×156ヶ所\_色紙1色19.5枚×4色
- 天井の網：半紙縦1/2を2つ折して作成\_計20枚（1丈）・色紙1色10.5枚×4色

総使用枚数：半紙\_120枚（6丈）・色紙\_4色×30枚=120枚

図 2-6 天井飾り配置図

## 準備と行事の様子

火伏念仏の当日は、区民のうち当番の班の者と六斎衆が朝八時から準備を行う。まず、六斎衆が集まり紙を切って御幣を作る。六斎衆以外の区民が縄を緋ない、それを天井に張り、御幣をつるす。区民館で行う場合には櫓うを組み飾り付ける。飾り付けられた御幣の下には、阿弥陀如来の掛軸と供物、灯明、太鼓が用意される。また、行事の最後にまく餅なども、供物の餅と一緒に用意される。

かつては各班からうるち米を集めた。一軒あたり五合以上の米を集めたというが、これは地域によって出す量が異なり、当番班は五合、それ以外の班は三合の場合もある。また、足形では、当番班とそれ以外の班では出す米の量が違い、足形の当番班は一軒あたり一升の米を出したという。

当日までに集めた米は、トウヤで餅にする。餅にするのは、集めた米のうち二斗程である。米を挽ひいた粉（上新粉）を熱湯で練り、蒸かし器に入れて透明になるまで蒸かした後餅をつく。つきあがった餅は、厚さ三〜四mmに伸ばし、三〜四cm角に切る。これが餅まき用の餅となる。火伏念仏でまかれる餅は「縁切り餅」なので丸にはせず、四角く切らなければいけない。また、米を集めて粉に挽くことから始めるため、餅をつく前から粉だらけになったという。後に粉挽きを店に注文して餅つきだけを行うようになったが、近年では粉挽きを注文する店もなくなったので、平成三〇年（二〇一八）以降は餅を買うようになった。

そのため今は各家から五〇〇円〜一〇〇〇円を集めて、市内上野にある上野製菓で押し餅のを買っている。厚さは5mm程度、5cm角程の大きさである。この時まかれる餅は、火伏の餅なので火に当ててはいけないといわれる。つまり焼いてはいけないため、食べるときには、お湯にくぐらせて黄粉きなこをかけたたり、黒蜜をかけたたり、水団子

にしたり、もう一度蒸かして柔らかくしたりするという。こうして餅や縄、御幣などを作り、一通り準備が済むと一旦休憩となる。

一 一時ごろから六斎衆が一回目の念仏を唱える。お昼を挟んで二回目、お湯に砂糖を大きじ一杯入れた砂糖湯で喉を潤してから三回目と、現在では念仏を三回に分けて唱え、三回目で天井に張った御幣を引きちぎり、その際に「融通念仏ゆうずうねんぶつ」を唱える。最後に餅をまき、お開きとなる。

一回目には、ブッコミと呼ばれる曲から三遍返さんべんがえしという曲まで、二回目には三遍返しと七遍返しちべんがえし、三回目にはブッコミから大ブッキリを行い、七遍返し、ケンネンブシ（懸念仏）、融通念仏、三遍返しから大ブッキリが行われる。なお、懸念仏は「カケネンブツ」と読むが、六斎衆が持つ「念仏集」という念仏の台本には懸念仏と書いて「ケンネンブシ」と読ませている。

午前中には、地域学習の授業として小学生の団体が見学する場面もあり、また、午後からの三回目には学校や幼・保育園から帰ってきた地域の子どもたちが参加する。このため、近年では餅のほかに菓子もまかれていた。菓子が用意されるようになったのは、平成に入る頃であつたという。

御幣は念仏の終わりの頃、合図があつた後に奪い合うものだが、現在は積極的な奪い合いに



写真 2-34 御幣を落とす様子

ならないため、あらかじめ頼まれている人が縄を引っ張って枠の外に落とし、分配する（写真2-34）。火伏念仏で使われた飾りと縄は、玄関などに飾っておくと火除けになるといわれ、行事に参加した人々はこれを持ち帰る。御幣や縄は、基本的には火に当ててはいけないものとされ、捨てることができない。そのため、屋外に飾っておいて風に吹かせて自然となくなるのを待つ。火に当ててはいけないと言われているが、古い御札やお守りなどを燃やして清める行事がどんど焼きでもあるため、どんど焼きの時に持って行く人もいるという。トウヤでは皆が持ち帰った後の余った御幣や縄をビニール袋に入れて屋根裏などにしまっておいた。

行事後、かつては直会なほらいが行われ、近所から祝儀として用意された酒と、トウヤと当番班が用意した食事が振る舞われた。この時には、集められた米や集金したお金が使用されたという。現在では、区民館で行うことが多いことから、櫓などの片づけをして終了となっている。

### 「念仏集」の表記と音楽

念仏の演目と歌は口伝であった。「念仏集」と書かれた念仏の台本は比較的近年にまとめられたもので、現在でも歌の節は口伝で、楽譜など音を記録に起こしたものはない。また、このほかに病氣治療、野辺送り、年忌ねんきの和讃わさんがあったというが、この唱えごとについては伝承者がいないため実施されていない。

太鼓のリズムは、三台の太鼓のうち中央に座る人のリズムに合わせる。中央には古い人（年配の人）が座ることになっている。太鼓のリズムを覚えるには人の叩いている音を聞いて覚えるが、耳で聞いて覚えるので、人の間違いもそのまま覚えてしまう。このため意外とみなバラバラであるという。「太鼓がものをいうように（叩け）」



写真 2-35 練習風景

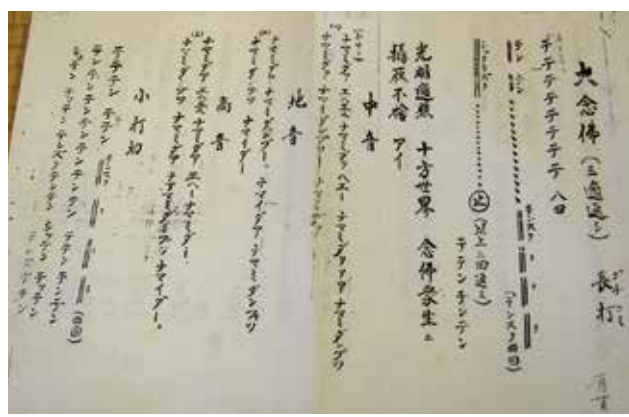


写真 2-36 念仏集

と言われ、家でも練習したり、前日ごろになると、布団の中でも頭の中が太鼓のリズムでいっぱいになるので、一通り頭の中で叩いてみたり予行演習をしているという（写真2-35）。

「念仏集」には、中音・地音・高音ちゅうね じね たかねと書かれた部分、音を「テン、テン」など言葉で表した部分、または経文きょうもんや歌の文言の部分などがある。中音・地音・高音とは、文字通り、真ん中の音、低い音、高い音で歌うことをいう。基準となる中音を頭の中で歌って高低差を引き出している。

中音・地音・高音と記された後の「ナマミダ」ないし「ナマミダブ」の部分は「南無阿弥陀」または「南無阿弥陀仏」の意味である。また、三遍返し・七遍返し・懸念仏のように太鼓の繰り返しや、唱える念仏ごとに題で区切られて表記されている。例えば、七遍返しとは、同じものを七回繰り返すの意味であり、六斎衆によれば初

めの念仏からコブツキリ（小打切）までを繰り返すことで六回と数える。そこにオオブツキリ（大打切）までの別の一回を足すことで七遍（回）返しとなる。コブツキリまでの中音・地音・高音の回数を数えて七遍返しという言い方をしているという。太鼓が念仏を区切る役割となり、コブツキリまでを一区切りとする。この一区切りを繰り返して、これにオオブツキリが付いている状態で締めとする。つまり、オオブツキリとは、曲をぶっ切る、区切るという意味で、コブツキリはそれよりも短い区切りをさしている。

しかし、この「念仏集」とおりというわけでもない。これまで示した表記に従うといくつかは音を延ばしたままにしておく箇所も見られるが、そのとおりでない箇所が数箇所見られる。諸先輩の音を聞き、耳で覚える伝承方法で伝えられるため、回数などに変化がみられるようである。

また、太鼓または鉦を叩くとき、南無阿弥陀は縁を叩き、次の南無阿弥陀までの間の節回しで太鼓の本体を三回叩く、というような、歌う時の太鼓の叩き方は示されていない（写真2-36）。

「懸念伏」については「出シ」という曲が付き、地音、中音と続く。出シは通常の中音の役割を果たしているものと思われ、その次の歌は、これに対しての「地音」となる。以降、中音と高音のみを五回繰り返すが、この繰り返しの中に地音は含まれない。「懸念伏」の最後に次のような文言を唱える。

西東ナくナ北ヤナ南ニシユサイナシア（衆災なしな）  
四方八面アビラウンケンヨー「ナーモダイミダンアイ」  
（二回）

アタゴサンナ（愛宕さんな）くナーシヨゴン（勝軍）

地藏ヲカンジヨシテナ（勧請してな）

火難水難ノガシ給ヘヨナーモダイミダン（三回）

ナマミダーア（南無阿弥陀仏）ユーズネンブツ（融通念仏）

この最後の「愛宕さん」とその本地仏である「勝軍地藏」は、江戸時代、火伏せの神として広く信仰された。この神仏に火難水難（火除け・水除け）を祈願し、多くの人が念仏を唱えて功德を融通する、というのが内野の火伏念仏の意味だと考えられる。

### 六斎念仏の広がり

内野には、山梨からやってきた人が多いという話が伝わっており、同じように根原ねはらでも現在の山梨県河口湖町から移住したという伝承がある。また、内野の火伏念仏は「六斎衆」と呼ばれる人々によって執り行われているが、根原には「大念仏六斎執心講中」と彫られた念仏供養塔があり、六斎衆が執り行う念仏が根原にもあったことがうかがえる。

なお、内野の火伏念仏は、火難除けを主としているが、内野区の横手沢は、火伏ではなく「無病息災」を祈って内野と同じ行事を行っていたといわれている。山梨県には、御幣を飾り念仏を唱え病氣平癒を祈る行事が点在しており、これと火伏の祈りが結びついた可能性が考えられる。

御殿場市にある川柳という地区でも御幣を飾り六斎衆が念仏を唱え無病息災を唱える同様の行事があるが、こちらは世附よづく（神奈川県足柄上郡山北町）から伝承したと言われている。行事の形式もよく似ているが、相互の往来や関連を示す資料は今のところ確認できていない。